

室町時代の伏見

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

伏見の遺跡といえば、まず、伏見城とその城下町をあげることができるでしょう。16世紀の末に豊臣秀吉により建設が始められ、徳川幕府による元和9年(1623)の廃城に至るまで整備が続けられました。現在、伏見の町の道路や西に向かって段々に傾斜する地形は、城下町建設の時に造られたものです。また、城郭や大名屋敷の屋根を飾った金箔瓦の出土品は、ご覧になったことがある皆さんも多いと思います。

では、伏見城が建設される前の伏見はどのようなようすだったのでしょうか。2005年から2006年にかけて行なった伏見区総合庁舎整備事業にともなう発掘調査では、伏見城が建設される前の集落を発見することができました。



調査地と周辺(北から)



室町時代の遺構



北西部の柱穴列・区画溝・井戸(北から)



調査地と金札宮（南から）

見つかった遺構には柱穴列・大溝・溝・井戸などがあります。出土した遺物から今から約400～500年前の室町時代後期の遺跡であることがわかりました。伏見城城下町が建設される直前の時期です。城下町建設は非常に大規模な土木工事であるため、それ以前の遺跡の多くは破壊されてしまいます。ところが、西に向かって傾斜する緩やかな斜面の、東側の高い部分は削り取られていましたが、西側の低い部分は整地のための盛土で覆われたことから遺跡がのこされていました。

柱穴列や溝は北側でやや東に振れており、ほぼ東西・南北方向を向く現在の伏見の町の道路とは異なっています。柱穴列は建物や柵の一部と考えられ、細長い溝は平行するものや直角に曲がるものがあります。溝で区画された敷地の中に家屋を建てて生活していたよ

うすが想像できます。柱穴が重複している部分があることから何度か建て替えが行なわれたことがわかります。また、井戸は直径約2.5m・深さ約3.9mあります。当時の人々も「伏見の名水」でのどを潤していたことでしょう。

これらの遺構は西側に多く分布していることから、集落の中心部は調査地よりもさらに西にあったことがわかります。そうすると、南北方向の大溝は集落全体の東側を区画する施設とみることができます。大溝は広い部分で幅約4.5m・深さ約0.9mもあります。集落が立地する斜面の上部から雨水などが流れ込むのを防いでいました。集められた水は北西に向かってのびる溝を通じて、さらに低い西側に排水されました。

記録によれば、室町時代の伏見には「伏見九郷」と呼ばれた9つの集落がありました。調査地の北

にある^{きんざつぐう}金札宮は、その一つである久米村の^{やしむ}社で、城下町建設以前から現在の位置にあるという言い伝えがあります。大溝を北へ延長すると金札宮の東側を囲う形となることから、調査で発見した集落は久米村の一部になるのかもしれませんが。

室町時代の集落が見つかったのは、伏見では今回が初めてのことです。出土した遺物は日常生活に用いられた土器や陶磁器が中心で、城下町から出土する桃山時代のきらびやかな金箔瓦に比べると地味なものです。

しかしながら、今後、周辺の調査がすすむことにより、少しずつではありますが、室町時代やもっと古い時代のようにすが明らかになることは間違いありません。城下町造営以前の歴史、それもまた伏見の歴史のひとつまなのです。

（山本 雅和）